

文芸

俳句

群がりて一人静かの賑はえる

池田 逸子

杉の木の高さに咲いて山の藤

伊藤 敬子

鯉のぼり爪先立ちの妹かな

今関満喜子

百円の値がつけられし目高かな

魚地 照子

田水満ち天空に風薫りける

江森 悦子

缶ビール仕事疲れといふ至福

川島 通則

乍に干潟田圃の植田風

向後 寛

青葉若葉しぜんの恵み心めぐ

越川せつ子

水芭蕉風が寒いか頬かむり

小松 藤男

水鏡蛙の声と日の光

佐瀬 輝夫

鉢除けて蟻の天地を崩しけり

椎名万里子

満目の青葉若葉の日の光

市東富美江

虚飾なき一途に働らく蟻の列

鈴木とし子

夕焼に染まる家並明日は晴れ

土屋美枝子

点滴の腕にて投句風は夏

土屋 義昭

木々の香や一直線に夏となり

早川 勇

新梢に五月の風の荒しとも

藤田 雅夫

短歌

野菜カゴあふれる程の荷を入れて

お隣さんと夏を分け合う

越川 義則

この駅に降りて逢きたき人あるを

思ひてしばし眼閉じあつ

高梨 キヨ

水平線くつきり見える初夏の海

波打ちぎわに親子たわむる

内藤 くに

.....

原色の絵の具を塗りしやうな丘

黄緑ひときは盛り上がりたり

八角 三枝

競り済みし銚子漁港はシャッターが

閉まり静かな倉庫群となる

鈴木まさ子

石榴の花咲きましたねと立ち止まり

声掛けくるる道行く人は

押尾 輝子

ひいひいと弱き声にて呼ぶ犬の

体位直さんと小屋に向かえり

椎名美枝子

骨折にギブスまかれた母の日に

手足のつめを子は切りくるる

ひたすらに水中ウオークの三十分

足を鍛へる吾の挑戦

田崎 尚美

腰をまげ一莢ひと莢もぎくれし

友のそら豆お菌黒の濃し

青木 秀子

ラジオから三味線の音が高鳴るを

気づかず眠る夫は夫の字

加瀬 弘子

五月晴れに都会の親子ら体験と

腕まくりして苗を植ゑる

水須 俊

萌黄色の山に囲まれ立つ駅の

ホームに吸ひぬ初夏の気を

西山満里子

亡き母の挿し芽をしたる蔓薔薇は

うす紅に苔ふくらむ

芹川 初子

芽吹きそむ椎の若葉の輝きを

楽しみとしてカーテン開ける

斉藤つね子

作品展

◎町民会館ミニギャラリー

7月 アート押し花クラブ

8月 華舟会

◎文化会館ロビー展

7月 華舟会

8月 短歌会

◎サビア展

7月 展示なし

8月 横芝写真クラブ

◎銚子商工信用組合展

7月 展示なし

8月 俳句会

こうほう
博物館 88

戦国時代の染付

前回の6月号では、江戸時代中期の染付碗を紹介したが、今回はもっと古い戦国時代の染付の焼き物を紹介する。これは芝崎遺跡で十数年前の発掘で出土した、中国景德鎮で明代に焼かれた染付皿である。見込中央に茶色に塗られたのは魚で、白に黒点はその目玉である。周りには青い呉須で、水草が描かれていて、魚藻文皿と呼ばれる。景德鎮は中国で磁都と呼ばれる。唐代に磁器材料のカオリンが発見されて以来、磁器生産が最も盛んになり、宮廷用食器をはじめ、民生用や輸出用に生産され、今日に至っている。そこで焼かれた磁器がはるばる日本に運ばれ、この地まで来たのである。日本では、この染付皿の多くは戦国時代の大名・領主に買われ、この皿

が出土してくるということは、戦国武将がいたことを示す証拠でもある。恐らく、芝崎にも戦国武将がいたのであろう。町民ギャラリーでは七月二十日まで「幻の青い皿 志田窯血展」を開催している。有田に近い志田窯で焼かれた江戸後期の皿を集めた展示です。ぜひ、ご覧ください。(社会文化課 道澤 明)



▲芝崎から出土した景德鎮製魚藻文皿